

# アメリカ史における女性像の変遷と 新しいフェミニズムの意義

小林 富久子

自然を決定的に征服した男性、アメリカの男性は、自然としての女性を、彼自身の女性的要素を、だれよりも恐れている人間である。

アナイス・ニン

『未来の小説』<sup>(1)</sup>

そのうち、胸の痛くなるほどの傷つきやすさなり、すぐれた感受性なりの象徴であった結核的容貌はますます女性の領分と化してゆき、——その一方で、世紀半ばから世紀末にかけての大物の男性の方は、堂々と肥満し、産業帝国を築き、何千という小説を量産し、戦争を繰り返しては諸大陸を掠奪していったのである。

スーザン・ソントグ

『隠喩としての病い』<sup>(2)</sup>

## はじめに

1960年代に端を発したアメリカのフェミニズムの動きは、従来の単なる女性の権利獲得運動にとどまらず、新しい種類の人間性回復運動、文化創造の運動として、アメリカの政治、経済をはじめ、学問、芸術の領域にまで影響を及ぼす「第二のアメリカ革命」とも呼ばれるものに成長している。女性によるこの種の動きは無論、今回アメリカで急に始まったわけではなく、過去から現在に至るまで世界各国の女性がよりよき自己のあり方を求めて様々な運動をくりひろげてきたことは、周知の事実である。しかしながらそれらは大半が例外的な女性

による例外的な地位・階級に属する女性のためのものであり、そのことがそれぞれの運動の広がりや成果を大幅に限定させてきたことは否めない事実といえる。ところが今回の米国での女性運動の一つの際立った特色は、それが、E・H・アルトバックらも指摘するように、中産階級を主力とする一般のアメリカ女性の強い共感を糧として盛り上がった“草の根”的なものである点で、<sup>(3)</sup> 運動の波及効果も、女性の権利獲得や地位向上といった従来の女性特有の問題に限定されず、アメリカ社会から人間性を奪うのに一役買っていると思われるすべての既成の価値観に批判的な目を向け、それらを根こそぎ揺るがそうとする、意識変革運動・文化運動的な様相を強く前面に出すに至っている。つまり従来「女権拡張主義」を意味した「フェミニズム」という語は運動の過程においてより広義な「女性によるヒューマニズム」を意味するようになったのである。

それでは、今日の女性運動を盛りたてた平均的なアメリカ女性とは一体どんな人々なのか？ また彼女達はどのような要因で運動に関わり、どのような希いや主張を運動に託しているのだろうか。こうした疑問を解くためには、まず一般的なアメリカ女性がおかれてきた固有の歴史的・文化的背景といったものを理解しなければならない。

かつてシモーヌ・ド・ボーボワールは『第二の性』で「女はつくられる」と述べたが、これはある意味では、他のどの国にもまして、これまでのアメリカ女性のあり方を適確に表現しているように思われる。というのは、メアリー・ライアンが言うように、アメリカでは、女性のあり方を様々に規定することは、常に「国家的事業」であり、その結果、「めくるめく程種々雑多な女性のイメージや役割」が、時々々の社会の要請に応じてつくり出され、それらのイメージや役割がそのまま大多数のアメリカ女性の実体を決定してきたからである。<sup>(4)</sup> 従って、異なる時代が生み出した異なる女性像の変遷をみることは、そのまま大多数のアメリカ女性の実際の歴史をみることを意味し、ひいては今日の米国の女性運動の固有な性格を浮き彫りにすることにも連なるだろう。

以上のような観点から、本稿ではまず前半において、植民地時代から今日まで時代毎に生み出されてきたアメリカの女性像の変遷を辿り、今日の女性解放の動きを発生せしめた土壌を探ることとする。次いで後半では、この運動の具体的な主張や内容、およびその特殊性をここ十余年間にアメリカで出された夥しい数の女性運動に関する論文や著書をもとに明らかにし、合わせて今回の運動における特異な成果としての「女性学」の誕生についても論及したい。

ついでながら筆者はこれまで、アメリカ文学を通じてアメリカ人の国民的アイデンティティ、あるいはアメリカ的性格といったものを探求することを主たる研究テーマとしてきたので、ここでも、今回の女性解放運動がこれまでのアメリカの伝統、あるいは「アメリカ的精神」といったものと、いかなる関り合いをもつかについても適宜論及していくつもりである。

## 1.

周知のように、元来アメリカ合衆国は自由と平等を基本理念とする理想的民主国家の実現をめざして建てられた国である。旧世界の宗教的・政治的圧迫を逃がれ、新大陸に辿り着いた独立・自恃の気風に富む開拓者達の目には、果てしない原野の広がり、そのまま無限の精神的成長と物質的成功の可能性を意味し、身分制度のないこの地では、未来はあらゆる者の前に“平等”に開け、個人の努力と能力次第では、いかなる夢も到達可能に思われた。

しかし、現実のところ、こうした「アメリカの夢」は最初から男性のみのものであり、女性は新大陸においても依然として独立した個人としての人格を許されず、ヨーロッパ伝来の父権制のもとで、夫もしくは父を主とする従属的地位に甘んじていた。つまり、女性にとって「アメリカの夢」とは、自らの努力や能力を通して勝ちとるべきものではなく、独立・自恃の精神に富む夫や父を通して初めて実現されるものであった。

このように、国家全体の理想が他国に例をみないほど、個人の可能性を重視

したものでありながら、女性が最初からその範疇外におかれていたという事実は、アメリカ史全体を通じて女性に皮肉な運命をもたらすこととなる。つまり、同胞の男性が精神的であれ、物質的であれ、自己の可能性を強力に推進すればするほど、相対的に蔭の引き立て役としての女性の地位は低下し、結果として、“民主国”アメリカにおいて、男性＝強者・支配者、女性＝弱者・従属者の基本的対比は強まりこそすれ、弱まることはなかったといえるのである。以下、この点をさらに詳しく掘り下げるために、アメリカ女性が迎ってきた足跡を時代順に概観してゆくこととする。

まず十七世紀の植民地時代——開拓者達がいまだ敵しい自然を相手に、基本的な生存の闘いをくり広げていた頃——女性は、政治的・公的的な権利は剝奪されていたものの、男性と共に農業・手織業・鍛冶屋業といった各種生産活動に従事し、精神的にはむしろ後の時代のアメリカ女性より強い独立不羈の人格を備えていたことが最近の種々の研究から明きらかにされている。<sup>6)</sup>ところが十八世紀に入り、次第に近代資本主義体制が整うと、女性は徐々に自給自足的家内工業での役割を失い始める。

そして19世紀、都市化・工業化が東部を中心に広がり、職住分離が一般化すると、多くの中産階級の女性は、もっぱら消費者として家事を預る専業主婦となる。つまり、男性を生産の担い手として、外的な社会の動きに対する全責任を負わせる一方、女性を個々の家庭管理の責任者としてのみ限定する、いわゆる性による役割分業の概念は、この時代に定着したのであり、この傾向は、当時マウント・ホリオーク・セミナリー(1836)をはじめ、Women's Academiesと呼ばれる女性のための高等教育機関が各地に創設されたことや、女流作家・ジャーナリスト等多くのインテリ女性が活躍したことによってもおしとどめられず、20世紀の今日に至るまで続いてきたというわけである。

無論、他の時代と同様、19世紀においても、すべての女性が家庭にとどまっていたわけではない。下層階級の女性はこの時代においても工場労働に従事し

ていたし、一方、超絶主義者のマーガレット・フラーや婦人参政権運動家のスーザン・アンソニー、エリザベス・ケイディ・スタントンといった初期のフェミニスト達も、女性を家庭外に連れ出し、歴史の参画者としての地位を与えるために熱心な努力を傾けていた。しかし、何ととっても、この時代にアメリカ女性の中心的存在となり、それ以後今日に至るまで大多数のアメリカ女性の生活規範を設定したのは、当時急速に数と勢力を増しつつあった平均的な中産階級の女性達であった。

『アメリカ文化の女性化』（1977）を著わし、19世紀米国の中産階級文化に関して鋭い洞察を示したアン・ダグラスは、この時代の一般の女性達に圧倒的な人気を博していた女性雑誌や流行小説、エチケット教本等を多数検討した結果、これらの読み物が、こぞって献身的な母親だとか、清純な乙女だとか、貞淑でエレガントな妻だとかいった、“お上品”で、家庭的で、感傷的な女性像を神がかりなまでに賞揚していたことを明らかにしている。<sup>ドメスティック</sup><sup>[6]</sup> かつての植民地時代における質実・勤勉を旨とする、散文的ではあるが積極的な女性像からこうした受け身の女性像への移行は何を意味するのか？ このことの背後には明らかに、当時、近代資本主義体制の確立がもたらしたアメリカ男性の変質という事実が存在すると考えられる。

マックス・ウェーバーの指摘で知られるように、すでに18世紀において、ベンジャミン・フランクリンは、『自伝』内で、絶え間のない刻苦勉励や克己心といったプロテスタント的仕事倫理を賞揚することで、アメリカの産業界で自己実現を果すための最上の道を説いていた。自己の努力と能力を世俗的な成功に結びつけた点でフランクリンは以後の多くのアメリカ男性に理想的なモデルを提供することとなる。しかし、正直さや善良さといった美德を成功の重要な条件とみなしたフランクリンの処世訓にはいまだ牧歌的な雰囲気を残していた18世紀当時のアメリカ社会の面影が伺える。ところが、19世紀に入り、産業界での競争が一段と激化すると、そこで働く男達にとっては、いかなる策を弄して

も人を押し倒し、競争に勝つことが肝要となり、フランクリン的美徳は影を潜める。代わって当時の産業界を支配し始めたのは「変化と貪欲と個人主義」であったとメアリー・ライアンは述べている。<sup>(7)</sup>

かくして暖い家庭を守る清らかで献身的な女性が男性の求める理想の女性像となる。戦場である職場から帰宅する男性の心を“純化”し、かつ彼らの疲れた身体をいやすのに彼女達ほどふさわしい存在は考えられなかったのである。このような女性像がそのころのアメリカ男性からいかに広汎な支持を得ていたかは、当時疑いもなく最も進歩的な男性の一人であったラルフ・ワルドー・エマソンすら女性を“civilizer of mankind”と呼んでいたことから伺える。<sup>(8)</sup>

また、当時生産者としての役割を完全に喪失し、自己の新しいアイデンティティを求めていた女性自身もすすんでこのイメージを受け入れたことは、19世紀の人気女流作家の一人イーデン・サウスワース夫人の次のような文章が如実に示している。

婦人の天与の特性は命令的、威圧的なものではない。それらは男性が誇りとする性格で、それによって男性はたびたび襲い来る困難や危険に相対するのである。婦人の特性は、むしろ、精神の純潔さ、心の素直さと正直さ、寛大さにあり、それは具体的な慈悲の行為として現われる。婦人の暖い愛情は、自らの人間関係を心地よいものにするために欠くべからざるものなのである。<sup>(9)</sup>

文中の旧式な美辞麗句をとり、より無味乾燥な現代社会学用語におきかえるだけで、性役割分業を固定的なものとした現代のタルコット・パーソンズ派社会学者による機能主義理論が現れることは明白である。

このように19世紀において女性の忍耐強さや犠牲的精神を最高の美徳とみる傾向が強かった反面、怠惰や贅沢に対する嗜好といった対照的性向も同時に女性にとってある程度望ましいものであるとみなす傾向が存在したという事実は注目に値する。このことに関して『アメリカ女性史』の著者アルトバックの説

明は次のようなものである。即ち、当時新しく歴史の主演として舞台上に登場した中産階級は自らの富と権威を示す象徴として「余暇のある生活の型——特に余暇のある女性の存在」を誇示するに至ったというのである。<sup>100</sup> アン・ダグラスもまたこの傾向を指摘し、それを証明するため、当時の人気家庭小説に度々登場した、美しく、消費を好み、寄生者であることをむしろ誇りとする自己撞着的なヒロイン像を『アメリカ文化の女性化』内で多数紹介している。

こうして現代にも続いている「行動する遅い男性」対「蔭で支えるエレガントな女性」というステレオタイプの二元論は、19世紀において産業資本主義体制の成立に伴い、男性側からの要求に応じる形で確立したのである。それはさらに、アン・ダグラスが指摘するように、当時女性の清純さと善良さを説くのに余念のなかった教会と、急速に発達しつつあった大衆小説・雑誌等のマス・メディアによって一層強化され、以後のアメリカ女性の地位を長期にわたって劣等なものとしたばかりでなく、女性を競争社会の支配的原理である攻撃性、闘争心といったいわゆる男性的価値観の間接的支持者としてことによって、アメリカ文化を一方向的に「男性的」、攻撃的なものとしていったのである。(但し、19世紀において、すべての男性が出世競争に明け暮れていたわけではないことは断わっておく必要がある。「人生の基本的現実にもみ直面するために」唯一人ウォールデン池に赴いたヘンリー・ソーローは、明きらかに、社会の内部における競争よりも大自然の中の孤独を好んだタイプである。彼の生き方はその後、メルヴィルのエイハブ船長やトゥエインのハック・フィンやヘミングウェイのサンチャゴ老人といった虚構中の多くのアメリカ的なヒーロー達に受け継がれる。しかし注目すべき点は、これらの男達の殆んどが森林や大海をバックに同性や巨大な生物と対決することとなっており、女性の存在は殆んど影すらみられないということである。このようにアメリカの多くのすぐれた小説が、ヨーロッパの場合とは対照的に“男性らしさ”を誇示し、実体のある女性像を描くことを殆んど拒否してきたこと自体、アメリカ女性が文化や社会の本流からい

かに徹底的に退けられてきたかを示す一つの重要な証しとなる。)。

## 2.

以上みてきたように、19世紀のアメリカで「女性的」と規定された種々の特性は、今日ベティ・フリーダンが「女らしさの神話」として規定したものと驚く程共通しているが、唯一つ両者の間の決定的な相違をあげるとすれば、それは sexuality に関わることがらである。至るところでセックス・イメージが氾濫する今日のアメリカと違い、19世紀のアメリカでは、性を罪悪視する傾向、とりわけ女性における性をタブー視するヴィクトリア的価値観は、本家のイギリスをしのぐほど根強いものであった。人妻や少女は言うに及ばず、売春婦さえ直接性欲とは結びつけられず、「彼女を売春宿に赴かせるのは彼女の無限の愛情による」とみなされていたとメアリー・ライオンは述べている。<sup>4)</sup>

こうした傾向に終止符がうたれるのは、第一次大戦後の1920年代のことである。「黄金の20年代」と呼ばれるこの活力に満ちた10年間は女性の生活にも画期的な変化をもたらしたのであるが、その第一は、アメリカ女性が長年求め続けてきた選挙権獲得がついに1920年に達成されたことである。当然の如くこの時代にはヴィクトリア風の受け身的で耐えるタイプの女性像は流行しなくなり、代りに現れたのが、男性と対等に未来を語り、対等に自由を謳歌しようとする積極的なタイプの女性達である。彼女達の欲した自由の中には当然性を楽しむ自由も含まれ、頭を短髪にし、喫煙しつつ、自由恋愛論にふける「新しい女」は、数こそ少数だったが、新時代を告げる一つの象徴ともなった。しかし時の経過と共に戦後の他の殆どの新奇な現象と同様、「新しい女」も急速に風化し去り、結局残されたのは、ただ性的満足を求めることにのみ積極的で、後は男性優位の社会的・政治的構造に組み込まれることに一点の疑念もはさまない旧態依然たる受け身的で依存的な女性像だったというわけである。

つまり、20年代の性的タブーの崩壊は皮肉にも女性に新たな固定的性役割



——即ち、男性にとっての性的慰み物としての役割——をもたらしたのである。この役割はその後のアメリカでますます大きさをましてゆくのだが、その主な理由としてメアリー・ライオンは、

- (1) 性における満足を幸福の最大の条件とみなすフロイド心理学が導入されたこと
- (2) 女性の性的魅力を利潤の増大に利用するハリウッド映画広告及び大衆ジャーナリズム産業が発達したこと

の二点をあげている。<sup>43</sup> こうして20年代以降アメリカ女性は、性的に魅力があることや性的に満足を得ていることを、“女性的”であることの新たな価値基準として受け入れたのであり、C・ライト・ミルズが指摘するように、男性を自己のグラマラスな魅力で操る術にたけた、いわゆる“オール・アメリカン・ガール”は、10代の娘から台所にいる家庭婦人に至るまで全米のアメリカ女性が模倣する対象となったのである。<sup>44</sup>

以上、17世紀の植民地時代から1920年代に至るまで、アメリカ女性の動きを概観してきた。それは一言で言えば、時代毎の男性社会の要求が各々都合のよい女性像をつくりあげ、それに各時代のアメリカ女性が順応していった歴史ともみることができる。後にも触れるが、これらの、時代毎に女性が与えられてきたイメージや役割を改めてふり返ると、各々の時代の女性像が何らかの形で今日の望ましき女性像に影を落していることが理解される。即ち、植民地時代の女性像からは実用的な女性のイメージ、19世紀からは献身的で貞淑でかつ消費好きな女性のイメージ、1920年代からは、性的対象物としての女性のイメージといったように指摘されよう。実際、今日のアメリカの望ましき女性像は、こうした異なる時代の異なるイメージの総和であるといってもさしつかえないだろう。

さて、ここで断わっておくが、これまで述べてきたことは、必ずしもアメリカ女性が他国の女性と比較した場合、社会的、政治的に低い地位に甘んじてき

たということを意味するものではない。それどころか、世界中で最も早期に「民主国家」を標榜した国だけあって、女性の教育や政治参加といった面では、常に他国に先んじて積極的な運動が進められ、成果をあげてきたのが実情である。ただここで改めて強調しておきたいのは、冒頭でも述べたようにいかに教育や政治上の権利を得たとしても、一般に過去から現在に至るアメリカ女性にとって、最高の理想とされてきたのは、自身が独立自恃の気風を養うことでもなければ、物質的成功を勝ちとることでもなく、そうした「アメリカの夢」を追って、雄々しく前進する、強くて男性的な“アメリカン・ヒーロー”に愛されること、言いかえれば、そのようなアメリカ男性の召使い兼母親的存在、もしくは装飾品兼性的対象物となるにふさわしい、女らしさの美德に満ちあふれた女性になることであったという事実である。

このように、元来人間間の平等、あるいは人間本来が持つ独自の能力の開発といった理想主義的な目標のもとに建てられた国家に生まれ育ちながら、自身は女であるためにそれを実践できず、かつまた、知識・教養および物質的豊かさの点ではきわめてすぐれた条件に恵まれながら、それを自己の人間性の練磨に活かせられないという、まさに二重のディレンマに、アメリカ女性の多くが苦しんできたといえる。そしてアメリカ女性がおかれてきたこのような固有の状況こそ、今日アメリカで、新しいフェミニズムの運動の発生を促す母体となったのである。

### 3.

アメリカの今日の女性運動を起す大きなきっかけをなしたのは、1963年に出された『女らしさの神話』(*The Feminine Mystique*)と題する一冊の本である。この本が三人の子持ちの一主婦兼ジャーナリストの手によるアメリカの主婦に関する本であったことは偶然のことがらではない。というのは、先に述べたアメリカ女性に固有のディレンマが最も顕著に存在するのは、中産階級の

主婦においてだからである。著者ベティ・フリーダンはこの書において、長年の間、アメリカの女性にとって垂涎的とされてきた郊外住宅地に住む裕福な妻達——即ち、若くて美しく、夫や子供に愛され、健康で教養があり、お金と暇にも恵まれ、何不自由なく、“消費の女王”として君臨する満ち足りた女性というイメージが、実はいつわりの神話にすぎないと主張する。多数のアンケート調査やインタビューを通してフリーダンは、これらの妻達の多くが、絶えずわけのわからない無力感や絶望感にさいなまれていることを指摘し、その理由として、彼女達が夫によって管理される「幸福な家庭」という収容所内に閉じこめられた個性と人間性をもたない飾り人形、あるいは愛玩動物的存在にすぎないからであることを示唆している。

フリーダンはまた第二次大戦後の40年代に社会での自己実現を求めて一旦職場に進出したはずのアメリカ女性が、50年代以降、急に家庭づくりに励み始め、そこから抜け出ようとしなくなった現象に注目し、その原因を主として、

- (1) タルコット・パーソンズ派の機能主義社会学者達が性役割分業概念に学問的権威を与えたこと
- (2) 広告業者やメーカーが家庭の主婦をひたすら“消費の女王”としておだて上げ、買物に走らせようとしたこと
- (3) 家庭外に出ようとする女性達を精神分析医達が性的抑圧による神経症患者であると決めつける傾向にあったこと

の三点に帰している。

この本におけるフリーダンの功績は、アメリカの中産階級の主婦達が長年の間、心の奥深くにしまい込んできた孤独感や焦燥感や絶望感を、初めていきいきと文章の上に表現し、それが女性自身の怠惰や神経症によらず、彼女達が人間として本来持っている成長への意欲を阻止されたことによるという事実を説得力をもって指摘することによって、19世紀から現代まで延々と続いてきた「女らしさの神話」を永久に葬り去ったことにある。

それではフリーダンの提唱した新しい女性の生き方とはどんなものか？ それは序文における次の文章において明きらかである。

私は女性も社会から影響を受けるだけでなく、社会に影響を及ぼすこともでき、最後には男性と同じように自分で自分の生き方を決められるようになり、自分の生涯を幸せにすることも、不幸にすることもできるようになると信じている。<sup>44</sup>

こうした信条をもとに、フリーダンは、その後1966年に米国の女性団体でも最大の規模を誇る全米女性同盟（The National Organization for Women 略して NOW）を組織し、みずからその初代会長として名実ともに今日のアメリカの女性運動の創始者となっている。

これまでのところ、NOW は、主として女性が男性と対等に社会進出を図れるように、雇用や給与の完全平等を求める平等権憲法修正案（ERA）や中絶権や保育所設置等の要求を掲げ、それらを立法・行政の両レベルで一つ一つ解決してゆくという、手堅く柔軟な姿勢を保持しているため、女性だけでなく多数の男性の支持のもとに数々の成果をあげている。

しかし、「男性との真に平等な協パートナーシップ力のなかで（中略）女性を今、アメリカ社会の主流へ全面的に参加させるための行動を起こす」（創立趣意書）<sup>45</sup> という NOW の方針は、必ずしもすべてのアメリカのフェミニスト達から受け入れられているわけではない。機会が均等に与えられれば、女性もすすんで自由競争に参加すべきであるとする考え方は、伝統的なアメリカ男性の“成功至上主義”に連なりうる。仮に NOW の主張に従い、何人かの女性が神経をすり減らした末、ピラミッドの頂点に登りつめたとしても、それは女性の勝利からは程遠く、従来片寄った男性的価値観を女性に移し変えただけで、社会の非人間化を一層推進することになるのではないか？ このような疑問を抱いた一部の若手運動家達は、1967年以降、シカゴやニューヨークをはじめとする諸都市で、よりラディカルな変革を目ざす女性解放団体を形成する。それらは大小様々な

規模を持つが、その主なものは、FLF (Female Liberation Front), WITCH (Women's International Terrorist Conspiracy from Hell), Redstockings 等である。一般に Women's Liberation Group (略して“Women's Lib”) と呼ばれるのはこれらの団体を総称していうのである。

これらの団体のメンバーは殆んどが「都会出身の、白人の、大学教育を受けた、中産階級の女性」<sup>40</sup> である点では NOW の場合と同じであるが、異なる点は、彼女達の大半がかつて何らかの反体制運動で男性と共闘した体験を持つ点である。彼女達が反体制運動から退いたのは、運動組織の中でも女性メンバーを単に女性であるからという理由で秘書やペットの代用品として扱いがちな、男性運動家の権威主義的体質が耐えられなくなったからとしている。それだけに、これらの団体はそれぞれ細部には異なる性格をもっているものの、男性を明確に抑圧者とみなし、女性同士が一つに団結することしか男性優位の社会を打ち崩す方法はないとみる点で一致している。これらの団体はしばしばマルクスの用語を用いて団結を呼びかける。

何世紀にもわたる個別的そして先駆的な政治闘争を経て、女たちは男性支配からの最終的な解放を獲得すべく団結し始めた……

女性は被抑圧階級である。その抑圧は全面的であり、生涯のあらゆる面に及んでいる。われわれは性的対象物として、子守りとして、家内奴隷として、また安価な労働力として搾取されている……<sup>41</sup>

(レッドストックング宣言)

また、これらの団体の殆んどは、階層序列的に構成されている NOW のやり方を踏襲せず、すべてのメンバーの完全な平等を期するため役員はおかない方針をとっている。

われわれは内なる民主主義をちかう。われわれの運動のなかでは、参画し、責任

を負い、各人の政治的能力を発展させるうえでの平等の機会をあらゆる女に保証するために必要なことはすべて実行する。<sup>49</sup>

(同上)

これらのリブ・グループの終局の目標は、女性全員がまず“意識の変革”によってみずからが被抑圧者であることにめざめ、互いの連帯 (“sisterhood”) を強めることにより、社会全体を従来の権威主義的・官僚主義的なものから、より生身の血の通った人間的なものに変革する“文化革命”を起すことであるとしている。<sup>49</sup>

現在の社会を打ち崩し、フェミニズムの原則に基づく社会を建設するとすれば、男性も現在あるものとはまったく条件の異なる人間社会に住むことを余儀なくされるだろう。それが実現するためには、フェミニズムの原則が革命的社会的変革の基礎として主張されなければならない。<sup>49</sup>

これらの急進的リブ・グループの表現は、しばしば生硬で、未熟で、扇情的で、感傷的でさえあり、運動自体も NOW ほど目にみえる実質的な功績をあげていない。しかし彼女達の存在が今日の米国の女性運動全体に与えた影響は無視できないものがある。最初はブラジャーを焼くなど奇異な行為で衆目を集めていたリブの女性達は、次第に法律・政治・経済など様々な角度から一般的な女性の生き方にも目を向けるようになり、新左翼に片寄っていた支持層を、フリーダンが『女らしさの神話』で呼びかけた中産階級の主婦達にも広げてゆき、結局、そうした主婦達がグループの中で重要な役割を演じるようになった経緯をアルトバックが『アメリカ女性史』の中で報告している。<sup>49</sup> 何よりも重要なことは彼女達リブのメンバーが今日のアメリカのフェミニズムの運動に思想的広がりを持たせ、従来の単なる権利獲得運動からより普遍的な人間解放のための運動にまで高めたことであろう。今日女性の解放を通してすべての人間を解放しようとする考えは、NOW を含めたあらゆるアメリカのフェミニスト

達の指導理念となっているといっても過言ではなく、それは60—70年代の様々な試練を経た全米の男女にアピールし、運動をさらに広めるのに大きな役割を果たしたといえる。

#### 4.

この辺で、われわれは、今日の女性運動の背景となった60年代半ばから70年代末までおよそ十数年間の時代環境といったものに注目しておく必要があるだろう。というのは、今日の女性解放運動は、長年にわたってアメリカ女性が人間性を奪われてきた過去の歴史に対する巻き返しであると同時に、疑いもなく、60—70年代という、アメリカ史における特異な一時期が生み出した時代の産物でもあるからだ。実際、今日のフェミニズムの動きはこの時代の米国社会全体に大きな影響を及ぼすと同時に、時代の諸々の動きから絶えず豊かな養分を吸収してきており、両者は常に不即不離の関係にあるといってさしつかえないのである。

60, 70年代を特徴づけるものとして先ずあげられるのは、ケネディ (1963) ・キング (1968) 暗殺事件、ベトナム撤退 (1973), ウォーターゲイト事件 (1973) といった一連の暗い事件であり、それらはアメリカ社会に潜んでいた諸問題を一挙に表面化させる役割を果たした。とりわけ、その意外性において、これらの事件の頂点をなしたと思われるウォーターゲイト事件は、権力の中枢に最も近い所に位置すると思われた人物すら、一個の歯車、もしくは道化にすぎないことを示すことにより、テクノクラシー専制によるアメリカの官僚機構がいかに肥大化し、非人間化しているかを如実に示す事件となった。また60年代から70年代にかけては科学文明による資源破壊、公害問題が大都市のみならず全米各地で問題とされた。

しかし、歴史的にみてこうした混乱と激動の時代はしばしば新しい息吹きを生むものであり、事実、長年女性と同様差別の対象となってきた黒人、インデ

ィアン、チカノといった<sup>マイノリティ</sup>少数民族の人々が激しい権利獲得運動をくり広げ、自らの地位向上に大きな成果をあげたのも、若者達がベトナム反戦運動や反体制運動を展開し、ビート・ヒッピーを中心とする対抗文化運動に花開かせたのもこの時期である。女性と同様、若者も少数民族達もアメリカ社会の権力機構から一貫して排除されてきたため、アメリカ社会がかかえる諸矛盾や問題に責任がなく、それらを自由に批判できる立場にいたといえる。女性は、これらのグループのうち、最も遅れて運動を始めた関係で、前二者の運動から様々な影響を受けた。例えば黒人の公民権運動からは、差別と偏見に関するロジックと用語を、若者、特にヒッピー達からは、アメリカを支配する競争原理と機械文明に対する批判的目をという具合に。すでに述べた通りラディカル・リブの若手メンバーは大半がいずれか一種の男女共闘による若者運動の経験者であり、当然過去の運動方法から様々な影響を受けているが、「NOW」という略称も“今すぐ目標達成を”という公民権運動のスローガンに由来することは注目に値する。

さらに、女性達の場合、これまで生み育てるという性役割を一方的に担ってきた関係で、管理機構やコンピュータに代表される機械文明に染まる率が少なかったといえる。従って、自分達こそ「不毛」な現代文明および社会機構に対してより人間的な暖かい血を注ぎこめるかもしれないと考える女性達が現れても不思議ではないだろう。逆にこのことはまた、男性達も今のように子育てや身の回りの雑事といった大人としての当然の責務から免れた、エマソン流に言えば、「部分的」人間に陥ることがなければ今日の文明も、今とは違った形のものになるのではないかという考えにもつながる。

こうした観点から今日アメリカの若い男女の知識層の間には、かつてバージニア・ウルフも“円熟した”境地として称揚した「両性具有性」(androgyny)に高い価値を付与する傾向が生じている。両性具有とは、一般にこれまで“男性的”美德とみなされてきた論理性・行動性・抽象性といった特性と“女性的”



美德とみなされてきた愛ややさしさ、弱く小さい者を育む心、繊細な感受性などの特性がバランスのとれた形で融合している状態をさし、これを実生活の面にあてはめると、男女が共に社会的・経済的に独立した人格を備え、共に社会を動かす力となると同時に、家事・育児にも責任をもつというライフスタイルを意味する。

これまでアメリカでは“女性的”なるものと“男性的”なるものは常に、各々、男・女の両極間に分離させておくことが理想とされてきたが、その結果、女性が“女性らしさ”のみを追求したことから生じた弊害、つまり受動的で自己撞着的な蔭の薄い人物が形成されがちであったことはすでにみた通りである。一方、男性がひたすら“男性らしさ”を追求することから生ずる弊害の方はどうか？ それは、仕事の世界と個人の内面的生活をはっきり分け、人生を勝つか負けるかのレースとみなし、目に見える業績のみを重視する悪しき仕事<sup>プロフェッショナル</sup>至上主義を生み出し、さらにその先は「戦争、エリート主義、搾取、そして自然破壊」であることが目にみえていとアドレアン・リッチが述べている。<sup>4</sup>

つまり、今日のアメリカのフェミニズムの動きは、「女らしさの神話」に終止符をうつばかりでなく、今日合衆国全体の悩みとなっている様々な難問題の元凶と目されている「男らしさ」の原理をも打ち崩そうとしているのである。それ故、「男と女、抽象性と具体性、永遠に価値あるものと、汚れ汗まみれになる日常の現実といった両極性の間に橋をかけ、二元を乗り越えてゆく」<sup>4</sup>（フリーダン）というフェミニスト達の訴えは、60—70年代のアメリカにおいては、女性のみならず男性にとっても福音を意味する言葉となっているのである。

## 5.

以上述べたことは、現行のフェミニズム運動のもう一つの重要な特徴——つまり、それが女性による政治運動というより、女性による文化運動といった側面を強く持つこと、言いかえれば、女性を単に抵抗する弱き性としてみず、新

しい文化の創造を担うに足る知的な力を備えた存在としてとらえる傾向にあること——にみられる。そしてその傾向は最も具体的な形としては「女性学」の誕生という形で花開いたのである。

さて、いわゆる「女らしさの神話」を一般の人々の意識に植えつけるのにマスメディアが大きな役割を果たしてきたことについてはすでに述べた。しかし女性に関する固定観念を作り出したのは必ずしもこうした大衆文化だけではない。学問・芸術といった高度に知的なエリート文化も結局は大部分男性学者・男性芸術家によって生み出されたものであり、それ故様々な方法で女性に関する一方的なイメージを作るのに一役かかってきたといえる。こうしたことに気がついたアメリカの女性の学者達は、自分達のために一つの全く新しい学問分野としての「女性学」(Women's Studies)を創始した。

「女性学」とは、一言で言えば、「女性とは何か?」という問題を、これまで無視されてきた女性側の視点から学問的に問い直すことを意味する。より詳しくは、現在南カリフォルニア大学で「女性学」を講ずる水田宗子氏の定義によると、「女性が社会活動のあらゆる分野からはみ出されてきたという歴史的差別の認識そしてその差別を思想的に正当化し、保護・維持してきた宗教、哲学、社会思想の分析、そして女性の視点、女性の歴史・文明への貢献を完全に無視してきた従来の学問への批判およびその改正」<sup>24</sup>を意味するということになる。女性学勃興の背後には、学問を現実の社会問題と密接に結びつけるよう要求した60年代の学生達による大学改革闘争とそれによって生み出された一連の新しい学問分野——例えば「黒人学」「少数民族学」「老人学」などの存在がある。「女性学」がその延長線上にあることは言うまでもない。

しかし、いわば「地球の半分」を占める女性のことであるから、その研究も手をつけ出せば果てしない程深く広い未踏の領域が広がっている。例えば、先程あげた水田氏の南加州大学では、現在、政治学・社会学・歴史・英文学・比較文学・民族学・東アジア研究・文化人類などの分野で女性学関係の講座が定

期的に持たれているということである。

今日まで恐らく最も多くの女性学者が手がけ、最も目立った研究成果をあげている分野は心理学と文学であろう。とりわけ心理学の分野では、これまでの女性観に大きな影響を与えてきたフロイド派の心理学が集中攻撃の対象となっている。例えば1978年に行われた第5回フェミニスト心理学全国大会では、女性と飲酒、両性具有、性による能力差、リーダーとしての女性、セクシュアリティ等といった多彩な題目に関する研究発表と討議が行われたことが報じられている。

文学の分野では、これまでも女性作家や女性の作中人物に関して男女双方の学者が様々な分析を試みてきたが、いずれも女性に関する古い概念に基づくものが多かった。しかし、今日アメリカでは、女性文学者の大半が想像力においては基本的に男女の間に生得的な差異は存在しない——つまりよく言われる“女性的想像力”は単に女性がおかれてきた特殊な環境から作り出されたものであるという結論に傾いているようだが、この点に関しては今後も議論が重ねられるだろう。<sup>28</sup> また女性であるがために歴史上見過ごされてきたすぐれた女性作家などを掘り返す作業も行われている。さらに神学の分野でもフェミニスト神学が現れ、これまで殆んど女性を扱わなかった男性経済学者等も最近の殆んどの著書において、女性従業員あるいは管理職に関して一章以上をさいている。

こうして、最初は女性による女性のための学問として出発した「女性学」は、男性研究者をも巻き込む勢いを見せ、究極的には、男女関係の歪みが是正され、学際的にあらゆる学問分野での一方的な誤びょうが正されれば、最後には、「人間学」(Human Studies)として一本化されることが期待されている。

## 結 論

ボーパワールは『第二の性』において、「今日の女性を解放したものは男た

ちによって実現された技術革命と男性の道德感の変化であり、女性運動そのものは決して自主的なものではない』<sup>84</sup>と述べている。確かにアメリカの女性達が今日、女性運動をかくも精力的に、かくも効果的に進め得ていることの重要な原因は、20世紀の後半において顕著となった「豊かな社会」の到来とそれに伴う技術革新にあることは疑いもない事実であろう。

特にアメリカの人口の大半を占める中産階級においては、ますます多数の女性が大学教育を受け、さらに修士・博士課程等に進むことにより、高度な知的思考力や分析力を磨き上げ、豊かな表現能力によって社会的な発言を強めている。また台所の機械化は、家事の簡便化をますます進め、<sup>バースコントロール</sup>産児制限における科学的進歩は多くのアメリカ女性をして、妻・母としての役割を越えた社会的な役割へとめざめさせている。さらにテレビ、ビデオ等の視覚的なマス・メディアの発達、女性運動家による各種会合、インタビュー、宣言文朗読といった大小様々なデモンストレーションを短期間のうちに多数のアメリカ人に広げる作用をもち、多くの運動家達が効果的にそれらを用いている。

この限りでは、確かに、今日のアメリカの女性運動もポーボワールの指摘通り、男性文化の影響を大いに受けている。しかし、同じ文章に続けてポーボワールは次のようにも述べている。「女はいまだかつて独立した階級はつくらず、またじつのところ、歴史の中でその性として一つの役割を演じようと努力したことがなかったのである。」<sup>85</sup>今日のアメリカの女性運動の歴史的意義を示すのに、恐らくこの言葉ほど適当なものはないであろう。すでに、「シスターフッド」の精神は全米の女性に広がり、政治的圧力としての女性の力は男性の権力者をも動かし、アフーマティブ・アクション法（女性や少数民族の人々の雇用者数や入学者数を主として人口比率に応じて決定することを義務づける法律）<sup>86</sup>から教科書の書き換え（男性中心に片寄った内容をもつ教科書や一方的な女性のイメージをもつ教科書を法律で禁じている）に至るまで、国や州のあらゆるレベルの政策決定に大きな影響を与えている。

かつて、ラルフ・ワルドー・エマソンは、新大陸の大自然の中で、いっさいの旧世界的価値観を廃して、過去の奴隷であることをやめることによって、人間が一人一人内にもつ、本来の人間性をとり戻すよう説いたが、過去において支配的であったいっさいの片寄った男性的価値観を退け、自己の本来のアイデンティティを探ろうとする現在のアメリカ女性は、まさにエマソンの精神の後継者であるといえる。フランクリンが世俗的な意味での「アメリカの夢」の確立者であったとすれば、エマソンは明きらかに精神的な意味での「アメリカの夢」の確立者である。ということは、つまり、今日のアメリカ女性は、史上初めて、男性を通じてでなく、自分達の手で、精神的な「アメリカの夢」を追求する地位を得たことを意味する。また過去において自分達を規制してきたすべての圧迫を退け、女性の新鮮な視点を社会や文化の隅々にまでゆきわたらせることによって、新しくより全人的でよりのびやかな理想的社会をつくらうとする今日の女性運動家達の意気込みの中には、開拓者時代以来ずっとひきつがれてきた理想主義的なアメリカ人魂といったものが感じられる。こうした理想主義的考え方、あるいは人間性に対する究極的な信頼感が、何にもまして、アメリカの女性運動を、他の国々の同種の運動から明確に際立たせた存在にしていることは確かだろう。

しかし、ここできわめて注目すべきことは、彼女達がそうした理想を個々の努力にのみまかせるのではなく、人間同士の連帯と信頼を通じて果たそうとしていることである。つまり、彼女達は、これまでアメリカで支配的だった強者中心の個人主義的考え方——即ち、個人は一人一人が自己の努力と能力次第で精神的・物質的な自己実現を図りうるとする伝統的な考え方に異議をはさみ、弱者をも含めた人間間の愛や連帯に至高の価値をおくことによって、伝統的な「アメリカの夢」そのものに修正を加えようとしているのである。この点、ある程度まで伝統的な能力主義や個人主義を評価していると思われる NOW のメンバーにしても、アフーマティブ・アクション法の成立に努力することによ

って、従来の能力偏重主義に歯止めをかける姿勢を見せているといえよう。

とはいえ、すでにエレクトロニクスあるいはコンピュータ文明が欠くべからざる生活の一部となり、テレビ、マスコミュニケーションによる情報洪水が人間から日増しに自律した思考力を失わしめている怖れのある今日——そしてとりわけ女性解放が部分的にはこうした科学文明の産物であることが明白である時——、いかに“女性的”な愛ややさしさといった感性をひろめ、互いの連帯を強めたとしても、今日の機械文明を“人間化”するのは生易しいことではないだろう。

これまで女性運動は、「女らしさの神話」をはじめとして、男性文化を彩る様々ないつわりの神話を次々と打ちこわしてきたが、それを常に支えてきたのは、今日のアメリカ女性達の旺盛な批判精神であったといえる。すでに女性が明確に社会的・文化的に大きな力となっている今日、未来社会のヴィジョンをもつことが要求されるのは当然だが、そうしたヴィジョンと、自己をも含めた現実全体を、さめた目で見通す批判精神とを、いかにして両立させるかは、今後のアメリカ女性にとって、最大の難問になることと思われる。ベティ・フリーダンは、解放後のアメリカ女性は「地図にない道を歩いているようなもの」と表現しているが、それはまさに個人的な意味でも社会的な意味でも、今日のアメリカ女性のあり方を最も適確に示す表現だろう。<sup>24</sup>

しかし、最後に、明きらかに女性の登場が今後のアメリカ文化にもたらすと思われる重要な利点をあげるとすると、それはこれまでのアメリカの「一枚岩的」な男性文化が、女性達の参加によって、多元的な価値観をふきこまれ、文化全体がよりゆとりのある洗練されたものとなる可能性をもつことだろう。すでにアメリカ社会は、60、70年代の様々な試練を経て、量よりも質、機械的能率よりも精神的ゆとりといったものを重んじる傾向が生じ、過去とは比較にならないほど、内省的で感受性に富む文化が育ちつつあるといわれている。これまでひたすら文化の主流からはずされてきたアメリカ女性の舞台の正面への登

場は、こうした文化の内面化を一層促進するのに役立つであろうと思われる。

### Notes

- (1) アナイス・ニン『未来の小説』, 原真佐子稿「アナイス・ニンの娘たち」『牧神9号』より引用, 1977年6月発行, 東京, 牧神社 p. 18
- (2) スーザン・ソントグ「隠喩としての病い」富山多佳夫訳, 『思想』, 1978年8月発行, 東京, 岩波書店 pp. 13-14
- (3) E. H. Altbach, *Women in America*, 1974. 田中・探川・中村訳『アメリカ女性史』東京, 新潮社, pp. 162-163
- (4) Mary P. Ryan, *Womanhood in America* (New York: Harper & Row, Publishers, Inc., 1975), p. 11
- (5) 特に Roger Thompson, *Women in Stewart England and America* (London: Henley and Boston, 1974) が詳しい。
- (6) Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New, York: Aefred A. Knopf, 1977) pp. 44-79
- (7) *Womanhood in America* p. 146
- (8) *Ibid.* p. 144
- (9) *Ibid.* p. 152
- (10) 『アメリカ女性史』p. 29
- (11) *Womanhood in America* p. 159
- (12) *Ibid.* pp. 253-303
- (13) C. Wright Mills, *The Power Elite*, 1956. 鶯飼・綿貫訳『パワー・エリート』上, 東京, 東京大学出版会, p. 129
- (14) Betty Friedan, *The Feminine Mystique* 1963. 三浦布美子訳『新しい女性の創造』東京, 大和書房, p. 18
- (15) Betty Friedan, *It Changed My Life*, 渥美育子訳『女の新世紀へ』(上) 東京 ジャパン・パブリッシャーズ, p. 127
- (16) Susan Brown Miller, "Sisterhood is Powerful," *New York Times*. March 15, 1970, p. 27
- (17) Shulamith Firestone & Amn Koedt ed. *Notes From the First Year*, 1968. ウルフの会訳『女から女たちへ』東京, 合同出版, pp. 212-213
- (18) *Ibid.* p. 215
- (19) Kate Millet, *The Sexual Politics*, 1976. 藤枝他訳『性の政治学』東京, 自由国民社 pp. 611-612
- (20) Roxane Dumber, "Female Revolution as the Basis for Social Revolution"

- The Voices of the New Feminism* ed. by Mary L. Thompson (Boston : Beacon Press, 1970) p. 56
- (21) 『アメリカ女性史』 pp. 162-163
- (22) Adrienne Rich, “Conditions for Work: The Common World of Women” *Working It Out* ed. by Sara Ruddick and Pamela Daniels (New York: Pantheon Books, 1977) p. xxii
- (23) 『女の新世紀へ』 p. 18
- (24) 水田宗子稿「女性学は現代学問体系の革命である」『フェミニスト』創刊号, 1977 東京, 牧神社, p. 49
- (25) 拙稿「エレン・モアーズ博士講演レポート」『フェミニスト』No. 6, pp. 32-33, を参照のこと。
- (26) Simone de Beauvoir *LE DEXIEME SEXE*, 生島遼一訳『第二の性』東京, 新潮社, p. 229
- (27) *Ibid.* p. 229
- (28) ダイアン・シンプソン稿, 田口雅子・小林富久子訳「岐路に立つアメリカのフェミニズム(下)」『フェミニスト』3号 p. 25における実力行使(Affirmateie Action)の項参照
- (29) 『女の新世紀へ』 p. 10